

適正施肥と薬剤防除組み合わせ最大効果

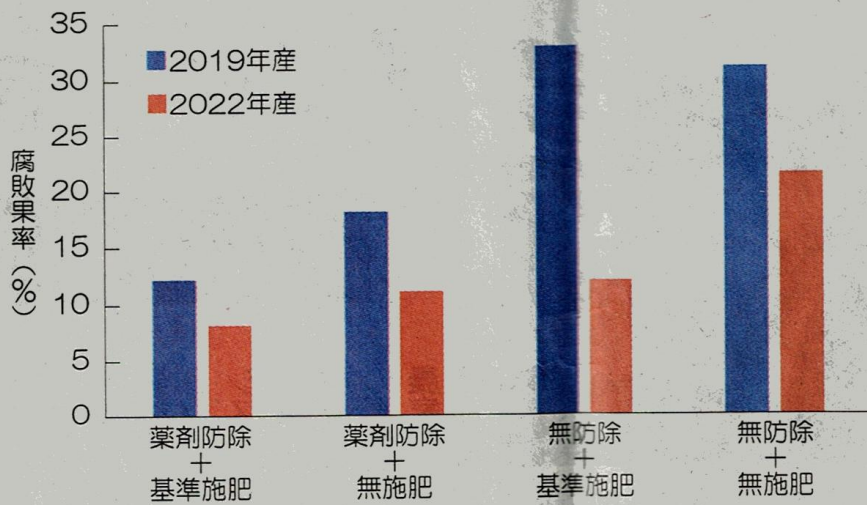


図 薬剤防除・基準施肥の有無と果実腐敗の発生

露地ビワの果実腐敗を抑制

種子周辺部から腐敗が進行



露地で栽培されるビワでは、収穫期に写真に示すように果実の種子周辺から表面に向けて腐敗が進行する障害（以下、果実腐敗）の発生が生産上の課題となっている。

現場で使える！研究成果

この果実腐敗は複数のカビによって引き起こされるが、主な原因は灰斑病菌というカビだ。この菌がビワの葉に引き起こす灰斑病は、県が設定した基準施肥量の半量以下では増加することが明らかになっている。そこで、薬剤による防除と適正施肥を行う耕種的な栽培管理を組み合わせ、果実腐敗の発生を抑制する技術を検討した。

その結果、開花期に3回の薬剤防除を実施し、基準量（年間の窒素成分の施用量20キロ/10アール）を施肥することで、薬剤防除のみを実施する場合、基準施肥のみを実施する場合、防除・施肥とも実施しない場合のいずれの場合と比べても、果実腐敗の発生が抑制されることが明らかとなった（図参照）。

ただし、窒素の過剰施用は果実が硬くなるなど、食味に影響するため、施肥基準に基づき適正量を施用する必要がある。この成果も含め、ビワの果実腐敗を防止するマニュアルは農林技術開発センターのホームページで掲載している。

（県農林技術開発センター 果樹・茶研究部門 内川敬介）